2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標の達成度	<p>ゴレーク地域の住民の間に、多くの病気は予防できるという意識が定着し、予防に必要な栄養・衛生改善策が実施される。</p> <p>達成状況：地域内の保健委員会の数が増え（去年の3村から5村へ）村人自身の手で病気予防・健康改善に取り組む意識は広がっている。先行して活動が行われてきたクズ・カシュコートとゴレーク村の井戸管理と保健の資料室運営は継続して行われており、感染症予防のためのキャンペーンは村人が協力して実施し、大きな実績となった。一方で、活動記録を残すことや中・長期的な計画を立てることなど、持続可能な自主グループを目指すためには引き続き課題が残る。女性による活動も計画通り滞り無く実施され、保健の知識がより広範囲に伝わっている。学校でも教員と生徒による健康教育を進める主体が立ち上がり、活動が開始した。今後、持続性を高めることが肝要となる。</p>
(2) 事業内容	<p>(ア) 保健委員会に焦点を置いた地域の自主的な保健の取り組み</p> <p>【保健委員会の活動が地域に定着するための支援】 保健委員会の呼びかけによる若者ボランティアが協力し、マラリア対策キャンペーンが実施された。井戸管理（定期的な塩素消毒）は継続的に行われているものの、井戸周りの衛生状況チェックやその記録は適切に残されていない。小規模共用資料室の管理・運営は滞り無く行われているが、まだ利用者の数は限られている。当団体職員によるモニタリングやアドバイスは保健委員会との定例会で随時行った。総じて、保健委員会が中心となる地域での保健活動は、途切れることなく続いており地道な活動実績を積んでいるという状況である。</p> <p>【保健委員会の運営能力強化の支援】 15年度中に新たに設立された2つの保健委員会を含むすべての保健委員会を対象に、行政機関などから招いた外部講師の指導の下、地域保健への取り組み方や組織の運営能力強化のための研修を実施した。また委員会の月例会を通じ、会議の進め方や議事録作成、活動報告書作成など実務指導を行った。特に年次計画と予算の管理、“持続性”の重要性を強調して運営能力の強化を図った。</p> <p>(イ) 地域における健康教育</p> <p>【家族健康アクショングループ（女性グループ）支援】 女性のための月次保健教室を予定通り開催した。参加者は各自、近隣の家庭をまわって勉強会の内容を伝え衛生状況を確認し、それをグループ内で報告・共有した。2年目に入った本活動では今年度、全体的にCHWがより活発になり、FHAメンバーに教えられる場面も増えた。</p> <p>【男性住民への健康教育】 準備に時間がかかり16年1月から開始。実施した全ての保健地区（ヘルス・ポスト）において村人の関心が非常に高く、予想以上の参加人数があった。</p> <p>【学校での健康教育】 高い関心を示していた4校との協議を経て、保健を担う主体を学校に置くことの重要性が確認され、選ばれた教員と生徒が学校保健協議会(SHC)を形成した。最初の取り組みとして学校を挙げて歯みがきキャンペーンを実施した。応急処置研修や健康をテーマとした生徒による作文を掲示する壁新聞も非常に関心が高く継続されている。この壁新聞で扱う作文を元に、当団体が初めてブックレットを作成・配布し、より広範囲に病気予防や健康的な生活への意識啓発を行った。壁新聞参加校で保健のテストも実施した。</p> <p>(ウ) 診療所運営と地域保健との連携</p> <p>【診療所運営と地域保健との連携】 家族カルテを活用した診療を行い、根本治療に病気予防の意識啓発に務めた。また、診療過剰な患者の家庭を訪問し、状況改善のアドバイスを行った。ワクチン接種も滞り無く行った。CHW（地域保健員）の協力により、患者や妊産婦を診療所に紹介する（リファー）例も多く見られた。なお、JVCの診療所運営は行政からも高く評価されており、今年度はナンガルハル県保健省から感謝状を受けた。</p> <p>【病気予防の促進と、診療所の規模縮小】</p>

	毎日、待合時間を使って健康教育を実施し病気予防の啓発に務めた。また、保健行政が定める基準通り、女医が退職して以来新しく雇用はしていない。
(3) 達成された成果	<p>(ア) 地域の保健委員会の活動促進と組織化について</p> <p>成果①【保健委員会の活動が地域に定着する】</p> <p>・マラリア対策キャンペーン：8月にクズ・カシュコート、バンガオ、フズバーグ村で自主的なキャンペーンとしてマラリア対策が実施され、対象者数や試薬使用の技術向上により昨年よりもマラリア感染の早期発見が増えた。保健委員会メンバーの呼びかけによるボランティア参加もそれぞれ10名を超え、同行する保健委員会メンバー自身の数も増えた。このように、保健委員会がリードし、村人たちが協力して実働部隊となっていく活動の蓄積ができてきている。ゴレーク村においてはボランティア選出に時間がかかり、実施できなかった。</p> <p>・井戸管理活動：塩素消毒は定期的に行われ、概ね、井戸の水質は保たれた。しかしながら、記録を取ることが未だ習慣化していないため記録は断片的であり、管理者による井戸周りの衛生チェックなどもあまり行われなかった。(既存の保健委員会のうち、クズ・カシュコートのサルヘリ地区は最も活発であり、委員会内で記録が取られ、共有されている。)当団体の地域保健担当が6月の来日の際に保健アドバイザーの西と共に写真を見ながら井戸の状況を確認した。いくつかの井戸は、フタが閉まらない、トイレから近すぎる、など物理的な衛生上の問題がある。(コンクリートで井戸の内部や井戸周囲を固める必要があるなど)</p> <p>・共同資料室：村人の識字率や読書への関心がまだ低いこともあり、利用者数は劇的には増えていないものの、(一か月に延べ30~50人ほど)、資料室を管理して利用者記録をノートに残すという活動実績は蓄積している。また、その場での閲覧だけでなく資料を借りる村人もいるが、これまでに未返却や紛失といったトラブルも聞かれていない。年度末には定例会で協働資料室の場所・開室時間・管理方法などを話し合う場を持ち、改善法をメンバー内で話し合った。</p> <p>成果②【保健委員会の運営能力が強化される】</p> <p>新しい保健委員会：5月から新たにバンガオとカチャラ村から保健委員会を結成してJVCとともに活動したい、との協力要請があり、6月ごろにメンバー選出がなされ、設立に至った。新しく設立されたバンガオとカチャラ保健委員会に向けて、保健省からトレーナーを招き、初めての能力強化研修を実施した(15年12月)。テーマは保健行政のシステムとその中での保健委員会の位置づけやCHWの役割、リファースystemなど。初期段階から地域保健活動の“持続性”を意識することが大切だということを伝え、そのために何ができるかのプレストを行った。それぞれ10名、11名が参加し、3日目はワークショップ形式を取り、関心が集まった。</p> <p>既存の保健委員会：ゴレーク村では12月に保健省からトレーナーを呼び組織強化トレーニング実施した。メンバーが入れ替わったこともあり、再度、保健委員会が地域で担う役割(そもそも保健委員会設置は保健省の打ち出す保健政策の一環である)などを学び、行政が作成した地域保健に関するガイドブックを使用した。19名が参加。クズ・カシュコートとフズバーグの保健委員会を対象に保健省からトレーナーを招聘し合同で3日間(2016年1月)の能力強化トレーニングを実施、それぞれ18名、12名が参加。今回は活動を計画的なものにし、より良い予算の管理を行うために「年次計画」を作成し、役割分担を決めるという点が強調された。定例会の記録はまだ十分ではないものの、作成されており、運営能力は向上してきている。</p> <p>(イ) 地域における健康教育について</p> <p>成果①【家族健康アクショングループにより病気予防の重要性が地域に伝わる】</p> <p>14箇所(各ヶ所につき15人の参加)において月次の保健教室が開催され、高い出席率を維持した。メンバーはその後他の家庭にも知識を伝えて回った。個々人の活動だけでなく、家庭訪問へのCHWの同行や複数メンバーでの訪問という動きが出ているものの当地の慣習や文化的背景からも、女性が“グループを結成して”活動するには困難があるため、どの程度のグループ活動を目指すのかは要検討。</p> <p>成果②【男性住民が健康教育の機会を得る】</p> <p>開始が遅れたが、開催地ではいずれも想定数25を大幅に上回る参加者があり(バ</p>

	<p>ンガオ：30名、タラン：40名以上、コティ：40名以上、カチャラ：40名、バル・カシュコート：35名、コティ：30名)3時間以上に亘っての研修に最後まで関心を持っており、好評を得た。“健康教育”的な内容と合わせ、地域保健員（CHW）や保健委員会の存在意義などについても多く時間を割いて説明した。ゴミの問題など地域共通の問題について啓発した。</p> <p>成果③【学校での健康教育を効果的に実施する主体が形成され、健康への意識が高まる】 SHC設立：今年度、学校で健康教育を推進し、生活習慣や校内衛生を改善することを目的として「学校保健協議会」（SHC）を4つの学校で設立し、各校4名の教員と10名の生徒を選出し、SHCの構成メンバーとした。SHCの役割は用務員やボランティア生徒の協力を得ながら生徒の身だしなみ、校内衛生、井戸のチェック、トイレの正しい使用法の指導など。<u>最初の取り組みとして、歯みがきキャンペーンを実施した。</u>（12月末）4校で250人ずつ、合計約1000人（男子750人女子250人）の生徒に対して歯みがきの大切さと磨き方を伝えた上で歯ブラシ&歯磨き粉、歯みがきの大切さを記したパンフレットのセットを配布した。</p> <p>健康壁新聞：毎月更新し、年間に二度保健のテストを実施した。（15年5月と16年1月）初めての試みとして、保健の作文を基にしたブックレット（1300冊）を編集・印刷し、学校にも配布した。生徒の作文だけでなくスタッフがまとめた保健の情報も入っている。2度目のブックレット作成は少し遅れたが3月に印刷・配布した。</p> <p>応急処置研修：ゴレーク中学校（11月）とタラン（2月）で実施し、合計41人の生徒が研修を受けた。刃物などの切り傷、銃弾などによる傷、火・熱湯による火傷、皮膚や筋肉の怪我への対処、出血とその後の感染などに対する処置の施し方、骨折時の対処、中耳炎、包帯の巻き方、鼻血の止め方、失神、水溺、動物や虫などに咬まれるなどの事態への対処、心肺蘇生法などを学び、いくつかのテーマは実践練習を行った。最終日には修了書と応急手当キットが各参加者に配られた。外部講師に頼ることなく、当団体職員が講師を務めた。その後、実際に応急処置を行った例も多々報告されており、成果を挙げている。</p>
	<p>(ウ) 診療所の運営および地域保健との連携について</p> <p>成果①【診療所運営と地域保健との連携が強化される】 各村の保健委員会はほぼ隔月で会議を行い、(ゴレーク・クズ・カシュコート・カチャラ村：定例会4回と能力強化研修1回、フズバーグ)、その都度、診療所情報（感染症の増加など）を共有した。地域保健員（CHW）とは、男性は毎月、女性は四半期ごとに集まり、情報共有と保健キットの補充を行った。加えて、CHWとしての訓練（男性は合計12日間、女性は10日間）を行い、病気・怪我の対処のスキルアップを図った。</p> <p>成果②【住民の健康管理意識・知識が向上し、患者の診療回数・薬の処方量が減る】 診療回数が多い7家族（ゴレーク村から4家族、クズ・カシュコート村から3家族）を選んで6月と12月に訪問した。症状は下痢、気管支炎、風邪、マラリア、体の痛みなどが多く見られる。多くは不衛生な住居環境や不衛生な水が原因とみられるが、物理的な改善（井戸の修理など）には家庭の経済力が関係しているためアドバイスを行うだけでは十分ではない。またスタッフのアドバイスも一般的すぎる側面があるので、もう少し具体的な改善案を示すことが求められる。アドバイスを受けた家庭の受信回数が減るかは今後の経過を見ることとする。また、患者の求めるがままに抗生剤処方をしていないように努めた結果、<u>年間平均で処方する薬のうち抗生剤は4割前後にとどめた。</u>（前年度は5～6割を超えることもあった）</p>
<p>(4) 持続発展性</p>	<p>村人の病気予防の知識や意識は高まってきており、上記のように村人のグループ（保健委員会・女性・学校）の自主的な活動、組織化が進んでいる。一方で、自主的な活動が仕組みとして根付くためには、年間計画の作成など、引き続き組織能力強化のサポートが必要である。また、活動継続のためには最低限の活動資金が必要とされ、現時点でその目処は立っておらず、当団体としても村からの募金を集める仕組みづくりや、行政や外部団体への申請書を作成するための支援などの協力も検討したい。特に農村地の女性の取り組みに関して、義務教育を修了し読み書きができる女性が少しずつ増えてきている今、文化的背景を十分に配慮しつつも新しいグループ活動のあり方を検討していく時期に来ている。</p>